

バリの風土と家系についての考察

森 宗 平
松 原 正 道

はじめに

インドネシア共和国バリBali州（島）におけるクランビタンKerambitan地区の王族の一人でありプリ・アニャールPuri Anyarの当主オカ・シラグナダ氏の家系の史的考察並びに旧所領地の住民に関する生態学アプローチと住民の「日本」および「日本人」に対する認知等に関する実証的研究である本ノートは、平成5、6年度の淑徳大学研究助成をえた研究の報告である。

バリの現状およびプリ・アニャールの旧所領地における住民に関する生態学的考察と住民の「日本」及び「日本人」に対する認知等に関する実証的研究を森が、クランビタン地区の現状とプリ・アニャールの現状および史的考察を松原が担当した。

そして、情報提供者はオカ・シラグナダ氏とその家族および地域住民である。

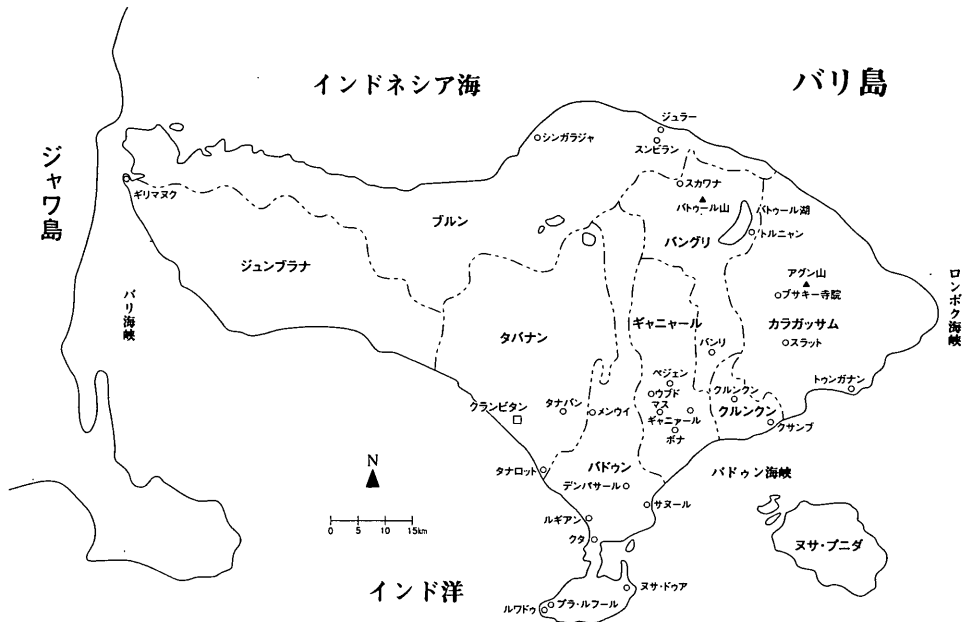
なお、本研究は現在も継続中である。

1. バリの現状(1)

5632平方キロメートル（コンサイス地名辞典 昭和52年 三省堂）と言う日本では愛媛県の広さに相当するバリ州（島）の行政区は、かつての王国の領地境界をもって区分され、今日の島内8県Kebupatenを形づくっている。

北部のブルルンBulelen, バングリBengli, 東のカラガッサムKaragasam, クルンクンKerunken, 西部のジュンプラナJembrana, 中央から南部に位置するギャニャールGianyar, タバナンTabanan, そして、州都デンパサールDenpasar, のあるバドゥンBadunである。

本研究の対象地であるクランビタンは、タバナン県（旧タバナン王国）に属する一地方で



あり、王国時代は王国の西の要衝で、隣りのジュンブラナ王国に対する砦のような役割を担っていた。従って、今日でもタバナンの王族とクランピタンのそれとは密接な関係にある。

イスラム教徒が大半を占めるインドネシアにおいて特異な存在を示すバリは、人口約244万人の多くがヒンズー教徒で、バリ・ヒンズーと呼ばれインドのそれとは多少違うと言われている。他に、イスラム教徒、キリスト教徒も見られる。

ヒンズー教の世界であるためカーストKastaがある。即ち、ブラフマBrahma, サトリアSatria, ヴァイシアWeisa, スードラSudraであり、インドのそれに似てはいるが、ブラフマを除き職業とは結びつかない。

バリでは上層三つのブラフマ, サトリア, ヴァイシアをトリワンサTriwangsaと呼び貴族階級をなし、スードラをジャバJabaと言い両者を峻別している。トリワンサは人口の約1割の24万人で、残りの9割にあたる220万人はジャバと言われる平民である。

従って、カーストによって名前の呼称も異なり、イダIdaはブラフマで、チョコルダCokorda, アナ・アグンAnak Agung, イ・グスティ・アグンI Gusti Agung, ヌグラNgurahがサトリア層特有のもので、グスティGusti, シSiがヴァイシア層で、その他はスードラである。オカ・シラグナダ氏のフルネームはアナ・アグン・ヌグラ・オカ・シラグナダAnak Agung Ngurah Oka Siragunadhaで、この名前から氏が典型的なサトリアであることが分る。

そして、それぞれの階層が所属する寺院についてもトリワンサではムラジャンMrajanでス

ードラのそれはプラPuraあるいはイブIbeである。

今日、インドネシアではカースト制度は法的には存在しない。しかし、バリでは、常に儀礼的場面においてはトリワンサとスードラとは峻別されている。寺院での位置づけは特に明確になされている。また、スードラはトリワンサに対して、たとえ経済的に優位であっても敬語を使い、座する位置も定まっている。

バリにおけるカーストのヒエラルキーを象徴する日常行動において、たとえば、言葉の面をとってみても、共通語であるインドネシア語とは別に、地域性の強いバリ語があり、階層によって用いる言葉が異なり、時により階層相互のコミュニケーションが成立しない場合がある。

トリワンサの社会的役割はブラフマ階層から最高司祭ブダングPedandaが選ばれる。ブダング以外のブラフマはその助手をつとめたり、公立学校でヒンズー教の教義や道徳を教えたりしている。

バリ州の歴代の知事はブラフマ出身である。前知事はバリにある国立大学の学長をつとめた後に就任、現在は駐インド大使である。現知事はオカ姓であるが、やはりブラフマである。副知事は将官がジャカルタから派遣され文化・スポーツ等を担当（以上平成6年当時）。

サトリア出身者の多くは、知事部局で行政担当の局長クラスを占め、法に携わり、また軍の幹部であることが一般的である。

王族（サトリア）の本来的役割期待は、伝統的な法を守り、外敵、悪霊、邪教から領民を守ることにある。今日では、本研究の対象地であるクランビタン地区のプリ・アニャールの当主であるオカ氏の例で考えるならば、かつての領民である地域住民の相談事、就職の斡旋、伝統的な儀礼についての指導や、舞踊、ガムラン音楽、野牛の咆哮を象徴化した客人を歓迎するための踊り（テクテク・ダンス）等の伝承に力を入れている。

また、かつての領民（スードラ＝平民）の現金収入についても様々な配慮がなされている。特に、観光客相手のパーティを催すことによって、トリワンサが法的権威による統治と、宗教的権威による統治の二重性を持つことを示しており、日常生活においてもこれらが均衡を保ち、常に法は宗教に従うと言う関係を明確にしている。そうした意味で、パーティを主催すると言うことは重要な意味を持つのである。

1. バリの現状(2)

バリにおける社会組織、社会集団、特に、農村地帯のそれは次の通りである。

1. 行政村, デサ・ディナスDesa Dinas
2. 習慣村, デサ・アダDesa Adat

3. 1つのデサ・ディナスに幾つかの伝統的な村デサ・アダが含まれる場合と、1つのデサ・アダが幾つかのデサ・ディナスに分かれる場合とがある。
4. 隣り組・自治会, バンジャールBanjar
デサ・ディナス, デサ・アダには, 集落ないしは部落ごとにバンジャールがある。
5. クリアン・ディナスKlian Dinas
バンジャール・ディナスの長, バンジャール内の住民の登録, 移動を管理する責務を負っている。デサ・ディナスとの連絡を業務としており, 部落から選ばれ, プルブクルPerbeker (行政村長) によって任命される。給料が支給される。
6. クリアン・アダKlian Adat
デサ・アダの習慣長, デン・デサDen Desaの下にあつて, バンジャール内の共同作業の責任を負っている。これらは, バンジャールがデサ・ディナスとデサ・アダとの二重構造を示すものである。
7. デサ・アダの成員
 - (1) アヤハン・デサAyahan Desa
祭り用の耕地の所有者
 - (2) スサブSesabuh
村の寺院の信徒であつて, 村の外に居住している
 - (3) 一般の村人
デサ・アダに住み, 村の墓地を使用する。
8. 水利組合, スバックSubak
 - (1) 灌漑を管理する
 - (2) 土地税を徴収する
 - (3) 共同作業 (水流整備等) を組織する
 - (4) 会員は共同作業に参加する義務がある
 - ①水路の巡視
 - ②米の運搬のための道路整備
 - ③集会所, 寺院 (スバックには寺院を祀っているので, 信徒集団でもある), 穀物倉等の補修・整備・新築
 これらの費用負担は水の配当量に依拠している
 - (5) スカ・スバック
水田に近接する人々の灌漑のための組合を意味する
スカ・スバックの規範とその逸脱については興味深いものがある。特に, 規範からの逸脱した組合員に対するpunishmentについては後述する

(6) プカセPukaseh

プカセはスカ・スバックにおいて選挙によって選ばれる

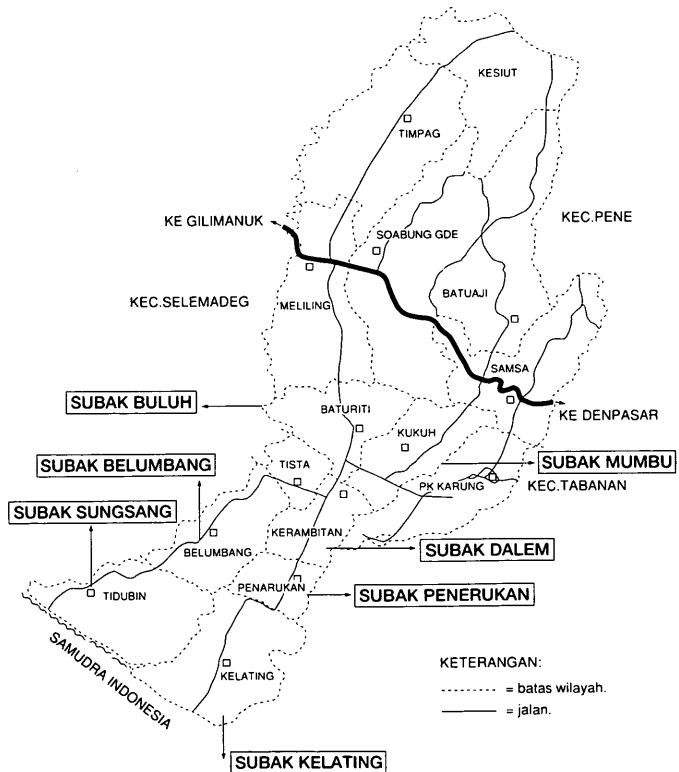
プカセ { ・クチャマタンKecamatan→スダハン・イエSedahan Yeh
 ・コブパタンKobupaten→スダハン・アグンSedahan Agung

(7) この組織は、王朝時代から今日まで存続しているとみられる。住民(村人)達はデサ・アダで1つのスバックに限定されるわけではない。複数のスバックに所属している例が多い。

バリの農村が日本の村落と異なる点は、あらゆる組織や集団が、一部落に重層的に、自己完結的に存在するのではなく、他の村落にまたがっている点である。

バンジャール、スバック、村の寺院、踊りの会、歌詠会、花作り会等々。バリでは村落を越えて他の村落と結びつく交差状態を示しており複雑である。村民達に所属している集団をあげさせると男女共に7つ8つの集団名をあげることからもその特色が窺える。

PETA WILAYAH KECAMATAN KERAMBITAN



こうした様々な集団や組織への加入は、一見、デサ・アダのcohesivenessを弱めるかに思われるが、バリの人はデサ・アダでは、常に、社会的、宗教的秩序の維持に貢献しなければならないことによって、むしろ、cohesionは強められている。

プタ・ウィラヤ・クチャマタン・クランピタンPeta Wilayah Kecamatan Kerambitan (クランピタン郡地区図)の実態については、次回の執筆で詳細なる解説と分析を用意する予定である。

2. クランピタンの現状(1)



写真1 クランピタン (プリ・アニヤール)

1. 面積

約150ヘクタール

2. 人口

約6000人

(1) 76%が農民

3. 戸数

約1700戸

4. クランピタンに属する村 (Desa)

(1) ククKukuh

(2) バトゥリティBaturiti

(3) プカンドゥランPekandelan

(4) ワニWani

(5) プナルカンPenarukan

(6) クラッティンKelating

5. バンジャールBanjar (部落)

- (1) 大体、デサとバンジャールとは一致している
- (2) 他に、バンジャール・ドゥクBanjar Dukuhがデサ・クラッティンにあり、7つのバンジャールとなる

6. 学校Sekolah

- (1) 小学校 エス・ディS・D 4
 - ①バトゥリティBaturiti
 - ②アカンドゥランPekandelan
 - ③アナルカンPenarukan
 - ④クラッティンKelating



写真2 バトゥリティ小学校

- (2) 中学校 エス・エム・ペーS・M・P
 - ①S・M・P Pramanandaは学校法人Yayasan
- (3) 高等学校 エス・エム・アーS・M・A
 - ①S・M・A Pramananda (法人)



写真3 エス・エム・ペー中学校 エス・エム・アー高等学校

7. 寺院 プラPura

1つの村、あるいは、地域には通常3つの寺がある。

- (1) 最も重要な寺 プラ・ダルンPura Dalen
- (2) 日常的な寺 プラ・サレン・ゴンPura Salen Gong
- (3) 墓のある寺

8. 館・屋敷・宮殿 プリPuri 3

- (1) プリ・グデPuri Gude (大きな館の意)
- (2) プリ・アニャールPuri Anyar (新しい館の意)
- (3) プリ・ジャンベPuri Jambe

2. クランビタンの現状(2)

研究対象地であるクランビタンは、タバナン県の中心であるタバナン市より南西約15キロメートルの地点にあり、クチャマタンKecamatan (郡) と呼ばれる行政単位を形成している。

約6000人の人口を擁する同地区には王族の3つの家族が屋敷であるプリ (Puri) を構えており指導的な役割を担っている。大きさの順からプリ・グデPuri Gude, プリ・アニャールPuri

Anyar, プリ・ジャンベPuri Jambeで、それぞれは姻戚関係にあり、プリ・グデが本家筋にあたる。

プリは宮殿とも訳されるが、宮殿と言うと我々日本人にはヴェルサイユ宮殿とかバッキンガム宮殿を想像しがちだが、それらとは趣きを異にし、研究対象であるプリ・アニャールは、現在、2ヘクタールの土地が6つに区画され、それぞれの境界は部外者には判別し憎いが、一階あるいは二階建ての建物が建っている。

そして、プリには、そこに属している姻戚関係を持つ王族ないしは臣下の屋敷および集団を持っているが、これをジェロJeroと言い一族の結束を示している。普通、プリの下には数家のジェロがあり、我が国における分家筆頭のようなジェロもある。

プリ・アニャールにはジェロ・ジュライJero Jelai, ジェロ・プルンバンJero Belunbang, ジェロ・デンJero Den, ジェロ・カワンJero Kawan, ジェロ・カンデルJero Kandelの5つが所属し、ジェロ・ジュライが筆頭でプリ・アニャールの行事に際してはプリの当主オカ氏の指示に従って行動する。

元来、プリ・アニャールに所属する土地（主として田圃）は約300ヘクタール（約90万坪）に及び、主としてクランピタンを中心にその他の地域にも点在しており、その土地がプリ・アニャールの富の源泉となっていた。

約150人の人間がこの土地の管理に従事し、収穫時には稲をかついだ農民が行列をつくり、時には、100キログラムもの稲をかつぐ者もあり、プリ・アニャールにある穀倉クリンキンKlinking (Cunbung) に運ぶ様は壮観だった。

だが、第2次大戦下の1943年には、日本兵がやって来てプリ・アニャールの門前に並び、収穫した米の運搬を邪魔したので米不足が生じ、そのため食べ物に困まり、食事に椰子の根、イモ、雑穀を混ぜて食べなくてはならなかった。また、オカ氏の姉が17才だったので家族は大変心配したが、ある日、白い馬に乗った「だいだんちょう」（オカ氏の言葉、大隊長ではないか？）がやってきて、門前に貼り紙をしてからは兵隊達は来なくなった。

ところが、プリ・アニャールの力の源泉だったこの土地も、1961年から始まった農地解放（1959年にニュースが伝わり、1961年にはプリ・アニャールに政府の役人が調査に来る）により、1974年には失う。

政府への売り渡し価格1ヘクタールにつき100,000ルピアで、当時の市場価格は3,000,000ルピアだったが、その頃、プリ・アニャールではオカ氏を含めて5人の兄弟（含・異母兄弟）のうち4人までが政府の役人をしていたため拒否はできなかった。

その後、1978～9年には、市場価格と同じ3,000,000/1ヘクタールとなり、他のプリでも土地を売り渡した。

農地解放後、我が国においても滞落した地主が多くいたと言う話はよく聞くところである

が、オカ家では土地喪失に伴う財政難打解のためその後、今日に続く観光客相手のパーティを催すようになった。パーティの詳細については後述するが、今日、それは盛況を見ており、プリ・アニャールの大きな収入源となり、併せて、村人に対し仕事を与え現金収入のチャンスを与えることになり、このパーティを主催することがプリ・アニャールの当主としての地位を保つうえにおいて大きく寄与している。なお、現在、同家の収入は、他に、オカ氏が受け取る年金（現役時の60%）と、氏が現在タバン市のプトリPutriの職（顧問）についているので、そこからの収入がある。だがパーティからの収入は大きい。

プリ・アニャールの9代目当主であるオカ・シラグナダOka Siragunadah氏は1930年に生まれ、ジャワ島の大学で政治・法律を学び、バリ州政府に勤務。ジャワ島出身のトゥティTuty夫人との間に長女マスMassさん、長男アデュスAdjoes氏、次男マニックManik氏の二男一女をもうけるが子弟はそれぞれ結婚し独立している。

州政府の公務員としては、特に、儀典長として、ワルトハイム国連事務総長、フセイン・ヨルダン国王、レーガン・アメリカ合衆国大統領、福田赳夫首相（以上、当時）等を接遇した。現在は公職を退き、クランピタンの地で地域住民のために指導的立場に立っている。

オカ氏の現在の立場を知ると言うことで、氏の行動の一端を記してみるが、これによって氏が占めている立場、特に、地域住民との関係を知るうえにおいて役に立つと言える。これは平成6年の松原の記録による。



写真4 オカ・シラグナダ氏夫妻と長男の花嫁



写真5 結婚式、長男アデュス・エラワン氏と花嫁アニーラさん、両端オカ氏夫妻

3. オカ氏の行動

3/21 (月)

- ・ 8時半頃 日本の浴衣姿で現われる
- ・ 9時半頃 昨夜、プリ・アニャールに泊った荘一家（台湾人）、中沢氏（淑徳大学卒業生）が帰国するので屋敷の一部（私的寺院も）を案内する
- ・ 10時過ぎ、甥のディキシDikishi氏が上記の人達を観光後空港へ送るので門前で見送る（扇子等の土産物を手渡す）
- ・ 3時頃日本人カップルのウェディング・パーティに出席、祝福を与えると共にパーティの催し物であるレゴン・ダンスを約1時間見ている

世界の観光客が集まるバリ島において、観光客の中にはバリ式結婚式を望む者がおり、この時は日本人カップルが日本での結婚式が終っていたのだが、バリ式のものもやってみたいと言うことでプリ・アニャールへやって来た。家族連れのこともあるようだ。このカップルの場合、新婦のツワリのため式が何回か中断した

- ・ ウェディング・パーティの後、夕方、村内のデサ・バトゥリティ、デサ・ククを約2時間案内してくれる



写真6 日本人の結婚式



写真7 日本人の結婚式

- ・ 7時頃夕食

トゥティ夫人は州都デンパサールの別宅に泊りに行ったので松原と二人だけで、オカ家のことについて話を聞く

- ・ 9時半過ぎ、部屋に戻る

3/22 (火)

- ・ 9時過ぎ、服装を整えて現われる

・ 10時、リング・ブダヤLinga Buddaya (「文化苑」の意でオカ氏を中心に一族および日本側から森・松原等が役員になっている文化事業を行う組織。法的に登録されている) と ジャパン・ガルダ・クラブ (森を主宰者とする文化・学術交流団体) の本拠地になる クラッティン・ビーチ Kelating Beach で、活動計画に関わる土地に来た11名の役人の視察に立ち合う (氏の長男アデウス・エラワン Ajoes Erawan 氏、森氏等同行)

・ 12時過ぎ、県都タバナン市へ。市長 (軍人で将官、オカ氏も文官だが現役時代は将官と同じ待遇を受けていた) に面会 (約30分間、アデウス氏、森氏同行、市長は軍服のような制服、インドネシアの役人は皆似たような服装をしている。オカ氏は服装は整えていたが、下はサンダル履きだった)

・ その後、タバナン王宮 (焼失したのを再建) そばの旧タバナン王の孫およびその妻と母に会いに行く

・ 2時頃昼食、リング・ブダヤの事業について話す

・ 3時頃部屋に入り5時頃出てくる (この間、昼寝、沐浴マンディ Mandi)。インスタント・ラーメン (日本製) を食べる。今夜のパーティの準備をする

・ 6時頃、デンパサールへ戻る森、アデウス氏を見送る

・ 7時過ぎ、ドイツ人約15名のパーティに出席。歓迎の挨拶をする。10時過ぎ終了

・ 10時20分、祈り (自室の前の建物で)

・ 10時30分、部屋に入る

3/23 (水)

・ 朝、自転車こぎ等の運動 (太り気味の傾向あり)

・ 11時、オカ家の菩提寺とも言うべきバトゥ・サラハン Batur Sarahan へ行くため白の正装で現われる。松原もバリ式の正装をする

・ 12時、甥のアグン Agung 氏の運転で従者2人を連れて出発

・ 1時半、到着、約20分間歩く、トゥティ夫人等と落ち合う

・ 2時過ぎ、約20分祈る。昼食 (蒸した米、焼きそば、野菜、家鴨、果物、菓子等持参したものを食す)、屋台が出ている。

・ タバナン王家の家族と会う

- ・ 帰途、神木、畑の中の社に祈りを捧げる。闘鶏に賭け勝つ（足に刃物をつけた鶏を闘わせ、いずれかが死ぬことで勝負がつき、これに賭ける）
- ・ 5時、帰館。今晚のパーティの準備をチェック。その後、休息
- ・ 6時半頃、パーティ開始（6時の予定なれど、オカ氏の休息のため少し遅れる。）出席者イギリス人約15名
- ・ 9時40分、終了
- ・ 9時45分、部屋に入る

3/24（木）

- ・ 5時に醒め、しばらく読書、再び睡眠、7時、起床
- ・ 10時、タバナン市のオフィスヘミーティングと書類のサインのために出掛ける（定年〈60才〉で公職は退いているが、パート・タイマーで半官半民の仕事〈プトリPutri〉の仕事をしている）
- ・ 1時前、帰館、トゥティ夫人にポケットの金を渡す
- ・ 夜、パーティ
 但し、松原が息女マスMassさんの第3子誕生パーティのためデンパサールへ行っていたため、詳細は不明

3/25（金）

- ・ 3時（松原の帰館時）、食事終了、しばらく、トゥティ夫人、オジと話をした後部屋に入る
- ・ 6時頃、パーティの準備のチェック
- ・ 7時過ぎ、パーティ開始
- ・ 10時、パーティ終了、パーティ担当者（ジェロ・ジュライの主）としばらく話をしている
- ・ 10時30分、部屋に入る

3/26（土）

- ・ 8時半、リラックスしたスタイルで現われる
- ・ 10時過ぎ、森氏一行と会うためタマナユンTaman Ayun寺院（バリを代表する寺院の一つ）へ出発。11時前、到着。森氏一行が未着のため待っているが、その間、バリ風焼き鳥サテSateを4本を食べる
- ・ 11時過ぎ、森氏一行（森ゼミの学生約10名）と合流、ブドゥグルウBudgruへ小型バスで行く
- ・ 12時過ぎ、到着、青物市場で学生達に茹でトウモロコシを御馳走してくれ、自らはプロッコリーを買う

- ・青物市場での買い物の後、ダヌンDanun寺院（プラタンBulatang湖に面した寺院）へ行くが、寒さのせいでバスから降りぬ。
- ・ 2時，帰館
森氏一行のためのパーティ開始。
- ・ 4時前，終了，邸内を案内
- ・ 4時半頃，森氏一行を見送る
バナナ1本，ライス，ワイン2杯を飲食
- ・ 5時 部屋に入る
- ・ 8時半 トゥティ夫人，松原と夕食
9時半 トゥティ夫人部屋に入る。11時過ぎまでオカ家についての話をしてくれる
- ・ 11時20分 部屋に入る

3/27 (日)

- ・リラックスしたスタイルで現われる
- ・ 9時20分，自らの運転でクタ・パレスKuta Palaceホテルへ向け出発。途中，タバナン市の親戚へ寄る
- ・ 10時20分，デンパサールのアニリールAnyrilにある別宅（日本式に言うと4DK位）に到着。女婿ウィヤサWyasa氏がいる
- ・ 11時過ぎ，ウィヤサ氏の運転でクタ・パレス・ホテル着
- ・ オカ氏，アデユス氏，マニックManik氏（オカ氏の二男），ウィヤサ氏，森氏，小林氏，小笠原氏とリング・ブダヤの事業について打ち合わせ
- ・ 3時，アニリールの自宅へ帰る。夕方は運転をするのが嫌やなのでここに泊る
- ・ 3時15分部屋に入り5時頃出てくる
- ・ 5時20分，来客，10分位。
- ・ 7時20分，満月の祈りを約10分する。
- ・ 8時30分，夕食（松原と二人）
- ・ 11時30分までオカ家の話をしてくれる
- ・ 11時30分～50分，電話
- ・ 11時50分，部屋に入る

3/28 (月)

- ・ 7時，起床
- ・ 8時，食事，シャワー，昨夜の話の続きをしてくれる
- ・ 9時10分，外出
- ・ 12時，甥のアグン氏と帰宅。昼食（調子が良いと言って沢山食べる）

- ・ 1時30分、アグン氏の運転でクランピタンへ戻る
- ・ 3時前、帰館、直ぐ部屋に入る
- ・ 5時、森氏達と会い話をした後パーティの準備をチェック
- ・ 8時前、パーティ開始。オーストラリア人約90名、食後のダンスの後のゲストの挨拶が長い（感動のあまり長くなった）のにうんざりしている。だが神妙に聞いている（アデユス氏談）
- ・ 12時、終了、直ぐ部屋に入る

3/29（火）

- ・ 9時前、服装を整えて現われる。ノトル・ワニラの話をしてくれる
- ・ 9時半、マスさんの息子が、昨日、盲腸の手術をしたので様子を見にデンパサールへ行く。森氏達と土地を見に行ったら後別れたそう
- ・ 6時過ぎ、帰館
- ・ 7時、パーティ開始。台湾の国会議員等約60名。
- ・ 10時30分、終了。出席していたフランス人夫妻（数年前、バリで娘を航空事故で失って以来毎年来島し、プリ・アニャールへも来ている）を邸内案内
- ・ 12時過ぎまで森氏、小林氏、小笠原氏、アデユス氏等とリング・ブダヤの事業について話をする。その後、部屋に入る

3/30（水）

- ・ 10時、デサ・バトゥリティのバンジャールへ連れて行ってくれる
- ・ 11時、帰館、息子と紹介された裁判官（多分、甥の一人だろう）と共に、バリの古い時代の王族、タバナン、バドゥンの王の話、クランピタンの古い話をしてくれる
- ・ 1時過ぎ、昼食
森氏、小笠原氏の作ってくれた「ほうとう」、「てんぶら」を食べるが、こう言うものは、ケーキのようなものを食べている感じがすると言って、更に御飯（バリ風焼き飯ナシ・ゴレンNasi Goleng）を惣菜（野菜と肉の炒め物）と共に食し、果物（バナナ、マンゴウ、ランブータン等）を食べる。氏は仲々の健啖家である
- ・ 3時過ぎ、出発。デンパサールのアニリールにある別宅へ向う
- ・ 4時頃、到着
- ・ 7時頃、帰国のため空港へ向う我々のために通りへ出て見送りをする

このように、筆者がプリ・アニャール、アニリールのオカ邸に滞在して観察をしていた限りにおいて、公職を退いているとは言え、仲々多忙であり、10日間に、パーティが3/21（月）の日本人カップルによるそれをはじめとして大小併せて9回あった。

パーティの準備については、実際は既述したプリ・アニャールに所属するジェロの人が中心に行われるのだが、総指揮および観光客の重立った者には終始オカ氏が対応している。

この10日間は毎日のようにパーティがあったが、年間を通してはこれ程ではないようで、平均三日に一度位だとのことである。

この間に行われたものの出席人数は最大で3/28(月)のオーストラリア人の90名で、それほどの大人数ではなかったが、これまでの最大のもの300人と言うものがあったそうである。

パーティの詳細については後述するが、先きに見たように、プリ・アニャールの当主としての役割として旧領民である地域住民への仕事の提供と現金収入の途を配慮することはオカ氏にとって重要な事柄なのである。そのためにもパーティを催すことはプリ・アニャールおよび地域住民にとっては大きな意味を持つことになる。

パーティは、出席者の大小に関わらず、その次第やメニューにはそれ程大きな変化はなく、人数が少ないからと言って内容を変更をすることはまずない。

4. パーティについて

プリ・アニャールで催される観光客相手のパーティは、当主であるオカ家にとって重要な役割を果している。オカ家の収入源としてのパーティの主催であると共に、地域住民への当主としての配慮との二つの意味を持つものである。オカ家の収入としては、その他に、現役時代の60%にあたる年金と、タバナン地区のプトリPutri職のパート・タイマーから得られる収入との三つがある。

だが、パーティの開催はオカ家の大きな収入源であることは間違いのないところであるが、それよりも重要と思われるのは、地域住民の仕事の確保と現金収入をもたらすということである。もっとも、パーティの担い手達はスードラSudraで、普段、彼らは農業に従事している。

通常、パーティには延べ200名程の人々が携わり、指揮をとるジェロの人達をはじめ、調理、給仕、ダンス、楽器演奏(ガムラン音楽)、演劇の役者、監督等々それぞれの役割に応じた仕事をし、それに伴った収入を得るのである。併せて、地域住民に娯楽を与えている。

その点で、当主としてのオカ氏の最も大きな役割は地域住民への気配りであり、彼が地域を歩く時には、常々、ポケットに小金を用意しておき、会った人達に、「御飯を食べたか」とか「身体に変りはないか」とかと言った類の言葉掛けをすると共に、用意した小金をそつと渡すのである。

筆者も、その様を見たことがあるが、今日の日本の社会ではこうした光景を見ることはないだろうが、一時代前の地主達の中にはこうした家父長的な者もいたと言うことを聞く。も

っても、誰にでも金を渡すのではないので、そうしたことが必要と思われる者をオカ氏が選別しているようだ。

パーティは、古くから伝わる客人を迎えるための儀式を再現したもので、通常は、午後7時頃、周囲が暗くなってから始まる。

ブリ（館・屋敷・宮殿）の前の道路の両側に炬火を持った10人余りの男性（パーティではオカ氏一族、踊り手、演劇の主演達を除き原則として半裸である）が立って待っているとこへ観光客が到着、彼らが客人（ゲスト）になる。

1メートル程の横長で奇怪な彩色をほどこした木製のベルを持った50人程の男性が指揮者の指示に従い、野牛の咆哮を象徴化した客人を歓迎するための踊りを声を張り上げ約20分間ベルを打ち鳴らしながら踊る（テクテカン・ダンス）。これが、可成り迫力があるため、驚かされると共に、女性の中には、感動のあまり泣き出す者もいる。

やがて、花や供え物、時に、素焼きの器に灯明をともした物を捧げ持った10人余りの裸足ではあるが着飾った女性を従えてオカ氏が門から出て来て客人達の前に立ち、その中の重立った者の前に進み出て、簡単な歓迎の辞を述べ、門の中へ招じ入れる。その際、門の両側および中庭に座っている約30人の楽士がガムラン音楽を演奏する。客人が門から中庭に進むと、先き程、門前で花や灯明を捧げ持っていた女性達が客人に向って花びらを浴びせ歓迎の意を



写真8 テクテカン・ダンス

表する。

客人は、オカ氏に導かれ、バリにおいて、正式な門とされている割れ門Candi Buntar（オカ家のものはバリではよく見られる割れ門ではなく上部がついているもの、通常は使用されず、側きの門を使う）を昇り降りしてパーティ会場である奥庭（雨の場合には、折り畳み式の簡易屋根を設置する）に入る。

全員が着席したところで、オカ氏がマイクを使って歓迎の言葉を述べる。そこに長男のアドゥス氏（夫妻）、次男のマニック氏（夫妻）、長女マスさん（夫妻）が同席する場合もある。夫人のトゥティさんは最初から出席していることは少なく、出席しない場合もある。

オカ氏の挨拶に対し、客人の代表が謝辞を述べ、両方で10分から15分程度が普通だが、客人が感動するせいか、時に、30分におよぶこともあり、そうした時、オカ氏はそれに耐えているのが分る。

オカ氏の挨拶の中に、これから食事のための料理を持った者達の行列が来るが、それらの料理はトゥティ夫人が担当したものであるということと、メイン・ディッシュとしてバビ・グリーンBaby Guling（子豚の丸焼き、インドネシアに多いイスラム教徒には山羊の丸焼きカンビン・グリーンKambin Gulingが供される）が供される旨が述べられる。

これらの調理のために、通常、10人余りの者が、そして、それを運ぶために正装した男女がやはり10人余り関り、所定の位置に料理が置かれると食事が始まる。給仕をする正装した女性から渡された大皿に自ら料理を取るピュッフエ・スタイルであるが、メイン・ディッシュは客人の中心に置かれ、皮の部分が美味と言うことで給仕の男性が取り分け客人の皿にのせる。この頃になると正装したトゥティ夫人が登場、オカ氏から紹介される。

それぞれが歓談しながら食事が進められ、オカ氏や家族の者達が重立った者達と共に飲食、その間、ガムラン音楽が続いている。

食事の終る頃合いを見計って、衣装に身を飾った男女の踊り手が10人程登場し、客人に踊りを共にすることを促し、男性の踊り手は女性を、女性の踊り手は男性の客人の手を取って、それまで、メイン・ディッシュが置かれていた中央へ進み出て踊りを始める。何分にもバリ風の眼の動きと手、特に、指先きの微妙な動きと腰の振りを特徴とする踊りと、西洋音楽のリズムに慣れている者には全く異なるリズムのため戸迷いを生じる者が多く、仲々上手くは踊れない。だが、中には、上手くりズムに乗って踊りこなす者もいれば、全くのマイ・ペースながら場の雰囲気盛り上げる者もあり、こうした者達は衆目を集め拍手喝采を得ていた。

そして、オカ氏も膝が痛いと言いながらこの踊りの仲間に入ることもある。

9時頃になり、食事と踊りが一段落すると、オカ氏が、邸内の私的な区域へ案内、ひとわり説明が終る頃、次の出し物であるヒンズー教の説話劇の準備ができ、客人は門から入った中庭に設けられた座席に座り芝居の見物をする。

筋立ては、説話物であるため勧善懲悪的なもので、善霊が悪霊に悩まされるが、最後には善霊が悪霊に打ち勝つと言うもので、この中に美しいお姫様を勇敢な王子が救い出し、目出度し目出度しと言う物語りが挿入されている。

この間、演者が陶醉状態 (trans) になってしまい、悪霊に対し刃物をつき立てると共に自らの裸の腹にそれをつき立て、刃物が折れ曲る程に力を入れるのだが、怪我ひとつしない。この芝居は客人と共に地域の住民も周りから見物しており、しばしば、そうした観客の中から興奮した者が芝居の中に入ってきて、同じように自分の腹に刃物を突き立てる者が出てくる。だが、筆者の見限り、客人の中からは陶醉状態に陥入る者はおらず、このあたりは、バリ人特有の精神構造を見る思いがする。そして、この陶醉状態も聖水をかけることによって直ちに元に戻るのである。

この芝居に関わる演者は男女併せて10人余りで、楽士は50人から100人で三つの村 (Desa) の者が担っている。

この芝居をもってパーティは終りとなり、最後に、オカ氏と、途中、自室に戻っていたトゥティ夫人が客人に別れの挨拶をする。時に、オカ氏一人の場合もある。

パーティは、通常、7時頃から10時頃までだが、その時の都合で、始まるのが遅れたり、時間が延びたりすることがある。一回のパーティに動員される人数は延べ200人に及ぶこともあり、また、観光客も10人弱と言うこともあるが300人と言うこともあり、時に、若いカップルによる結婚式もあるが、パーティの次第については上記のものとはほぼ変わらない。

おわりに

以上、本研究における、今回の主題であるクランピタン地区、プリ・アニャールの当主オカ・シラグナダ氏の行動を氏が主催するパーティとの関わりで眺めてみたが、氏の行動を見ることで、氏が現在置かれている立場を垣間見ることができる。

観光客相手のパーティではあるが、それは単に観光業者が行うそれではなく、本ノートで記した如く、それは飽く迄も、旧領民である地域住民へのプリ・アニャールの当主としてのサービスの一環であることが分る。

今後、こうした当主としてのサービスがどれだけ行われ、かつ、行われなければならないか分からないが、趨勢からすると、当主と地域住民との関わりは稀薄になって行かざるをえないのかと感じる。オカ氏の長男アデュス・エラワン氏、次男マニック氏は共に結婚して独立、プリ・アニャールの外に居をかまえている。そして、彼らは共にデンパサールの学校を卒業しており、地元で親しい友人がいないとのことである。また、他のプリにおける同年代の親族との交流もないということである。

こうしたことが、今後、プリ・アニャールの当主と地域住民との関係をどう言う方向へもって行くかと言うことを示唆しているように思える。

ただ、バリ島が、世界の各地から観光客を集めるリゾート地としての性格を変えなければ、質的变化を来すかも知れぬが、観光客相手のパーティの存続は考えられが、地域住民との関わりが薄く、今後、プリ・アニャールの当主と住民との関係をどうもたすのだろうか。特に、住民の経済的地位向上がなされた場合のことを考えると、好むと好まざるとに関わらず、プリ・アニャールの当主と地域住民との関係は変わって行くだろう。

平成2年3月に筆者等がマドキンMadokin学園で行った講演会「テクノロジーと文化」においても、バリ島では、今日、種々のテクノロジーが日常化しており、そのために、古来の文化が次第にすたれてきていると言うことに対する危惧が指摘された。

時代の流れと共に、古来の伝統的なものの喪失が行われるのは歴史の常であり、それを発展と捉えるのであるが、バリ島もその例外ではないと言えるのであろうか。

(続く)

Research Note

The Social Climate and Lineage in Bali

Sohei MORI

Masamichi MATSUBARA

Mr. Oka Siragunadah, who is the 9th head of the family of Puri Anyar Kerambitan in Tabanan Bali-state Republic of Indonesia, had worked as a state goverment officer-mainly protocol-for long years and treated many VIPs all over the world.

He has a responsibility for communities' social-welfare and pursues it by making chances for residents to take jobs and incomes with holding sightseeing parties which residents take part in.

The purpose of this sutdy is seeking the present condition of the old Kingdom family and aristcracy and the consiousness of community residents and how it has changed through these activities.

This time we focus our study on the present condition of Bali-Island and the behavior of Mr.Oka and the lives of his families and want to show "the climate and lineage in Bali" the subject of this study.